

SCI運動とサルボダヤ

小林 茂夫

(SCI極東アジア地域トレーニングセンター)

小林茂夫氏は、一九六四年に約一〇ヶ月、SCIからの派遣でインドに滞在した。現地では、インドSCIの活動に従事する一方、SCIとはいろいろな形で関係の深いサルボダヤ運動関係のキャンプにも参加し、アシラム(注・道場、塾の意味)に泊まって、村の道作り、農作業、チベット難民のための保育所での労働等にもかかわる機会を持った。

帰国後、SCI日本本部で三年間の活動を行ない、その間、SCIの機関誌「つるはし」にヴィノバの「革命的サルボダヤ」を翻訳連載した。

昭和四四年四月、家族と共に山梨県金峰開拓地に入り、「SCI極東アジア地域トレーニングセンター」の駐在者となって今日に至っている。このトレーニングセンターの役割と、金峰開拓の歴史については、小林氏が「月刊キプツ」六月号において「ひとつの試み—金峰プロジェクト」と題して詳しく報告しているのを参考にしてほしい。

又、現在はSCI国際委員会の日本代表委員としてSCIの国際的な活動の在り方を考えていく任も与えられている。

本稿の目的は、サルボダヤ運動からかなり深い影響を受けているといわれる日本のSCI

I運動とサルボダヤ運動との関係をいくぶんでも明らかにし、同時にSCIの活動の現状と、現在のワークキャンプの問題点にもふれようとするものである。

なおこの原稿は、小林氏へのインタビューをもとにして制作部が構成した。



日本のSCIが、インドのSCIへメンバーを派遣するようになってから、約一〇年が経ちます。大体、一年に一人の割で現地へ行っていますから、一〇人ぐらいのメンバーがむこうでの活動に従事したといえるでしょう。現地での活動の条件としては、あらかじめ定められた契約期間は、SCI活動に全面的に参加するということです。現地でSCIの活動に参加するうちに、日本から行ったメンバーのだれもが、少なくとも最低一度は、サルボダヤ運動関係のキャンプに参加しているようです。

インドのSCIからは、これまでに三人程度が日本で活動したにすぎませんが、これは、インドの外貨事情が悪く、国外に出かけることが困難だからです。インドのSCI自体は、

古い伝統をもっており、メンバーのなかには年寄りもたくさんいます。

SC I運動とサルボダ運動との古い関係をさかのぼっていくと、サルボダを唱えたガンジールと、SC I運動の創始者であるピエール・セルゾールとのあいだに何度か接触があつて、いろいろな話をしていて、ということがあります。二人のはじめての出会い、ガンジールが独立運動をはじめてもまもなくのころということ。この二人のあいだに、ものの考え方において相通じるものがあつたということとは当然考えられるわけです。

SC Iとの思想的な共通性としては、なによりも、自分の肉体を動かして、地域のめくまれぬ抑圧された人々のために労働し、何



かをつくりだしていこうとすることがあるでしょう。

非暴力の思想や、そこから生まれてくる無抵抗主義といった点においても共通性はあるわけですが、SC Iの運動自体はかなり限定された、政治的色彩のない団体ですから、大きな意味で政治的な意味あいもかなり含んでいたこういった点での直接的な関係はあまり強調することはないと思います。

このように、なにもセルゾールとガンジールの関係といったものまでさかのぼらなくても、SC Iとサルボダのあいだには似かよった原理によって動いている面があるわけなのです。又、日本でSC I運動を始めた人は、インドでヴィノバと共に歩いたこともある人であり、SC Iの運動をはじめると同時に、サルボダの思想を紹介していたことを覚えています。そのことなども、私たちの頭の中に残っていたわけで、日本のSC I運動がサルボダからの深い思想的影響を受けているということができるでしょう。

ただ、あまりにもインド的なサルボダ運動が、すぐに日本の運動と結びつくとか、それを日本の土壌で生かせるというふうには考えていません。すくなくとも同じ形態の運動

が起ることはないだろうし、そのことはいくら我ががイスラエルに発達したキブツを学んでも、それと同じものが日本でできるのかというところではないということと同じだと思います。

ところで、このサルボダ運動の現実自体に対しては、私たちは必ずしも手ばなしの評価はしていません。

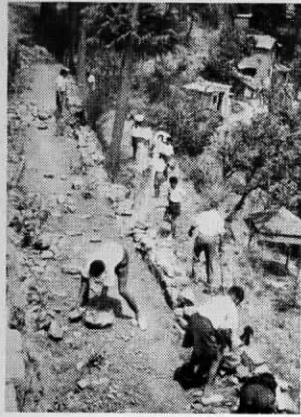
「サルボダヤ」（すべての向上）ということとは、ガンジールによつてはじめて使われ、運動としても作りだされていったものであつたわけですが、これはガンジールが南アフリカ時代に、イギリスのジョン・ラスキンの著書に接して、そこで盛られていた思想を直接に生かすことをめざして開始されたものです。

御承知のように、ガンジールはインドを独立へ導いていったのですが、独立後、彼のもとにあつた人々の大部分は、政治的な方向へむかつていったので、そのことにガンジールは失望しました。そうしたなかで、ガンジールの思想を実践的に継いでいく者としてヴィノバがうかがひがあり、ガンジールの死後はサルボダ運動の指導者として、その思想を展開していくわけなのです。

それがまず、ブーゲン運動として開始され

ていきましたが、これは土地所有者を説得して、貧しい人々のためにこれを解放してもらうという形で進行していきました。

しかしながら、ガンジールやヴィノバの思想を十分に体得した人ばかりがここに集まつてきたとはいえないのです。精神的な堕落がはじまつたと批判されるのですが、私はインド人ではないのでその原因を正しく把握することとはできていないかもしれません。私自身の体験から言えば、指導層にある人が肉体労働はほとんどしないというようなことが起ってくるわけなのです。インド人というのは伝統的にそのようなかもしれませんが、実に多弁であらゆる事柄についてとどめを知らずに話すのだけれど、仕事はしないんですね。カース



ト制度によつて、仕事の分野もそれぞれに分れているのですが、こうしたことがアシュラムのキャンプのなかでも起こります。それを根絶するのは程遠いことだという気持ちがしましたね。これがなくならない限り、サルボダ運動の成果もおぼつかないのではないかと思います。キャンプで仕事をする意志をもつていても、肉体労働の経験に乏しくあまり仕事にならなかつたりで、実際には泥にまみれて仕事をする人の方が少なかつたりもしたのです。

インドの他に、SC Iではメンバーを世界各国に送り出して国際交流を行なっています。アジア地域では、タイ、マレーシア、シンガポール、セイロン、パキスタン、ネパール等へも行っていますし、ヨーロッパやアフリカへも行っています。

SC Iの場合、海外派遣希望者名簿というのがあつて、そこに希望者は登録しておくという形を取ります。このリストから選考を行なうのですが、条件として、まずワークキャンプの経験を積んでいること、生活していくに不自由しないだけの十分な語学力のあること、キャンプでの労働ができるだけの体力を備えていること、以上の三点が挙げられます。

現地での生活で必要とする経費一切は、受け入れる側のSC Iがめんどろをみることになっていますが、渡航経費の負担はその都度異なります。どうしても行つてもらいたい人にはSC Iが旅費の負担をすることもありますが、お金の余裕のある人には自己負担をしてもらうこともあります。

しかし、希望者の数は全体として多くはありません。国際的な組織として少し数が少なすぎるのではないかと批判もありますが、世界のSC I全体の国際交流でも年間一〇〇人はいないと思います。

日本のSC Iの活動では、学生の数が最近激減しました。数年前までは各大学に学生の参加者が多くいたのですが、特に関東地区での学生のメンバーがほとんどいなくなつてしまいました。支部が、関西、北陸、広島、北海道等にあつて、以前は各支部がキャンプを組織していたのですが、現在はほとんど行なわれていません。

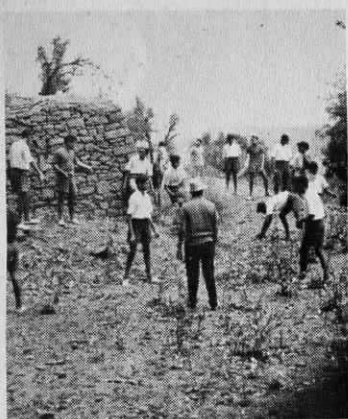
又、以前の活発なメンバーは大学を卒業して社会人となり、それぞれの仕事についているために時間的な制約が大きく、活動のできる時間はおのずから限られてきます。

ワークキャンプの場合、どうしても時間的

な余裕をもつ学生を核としなければ、ほとんど活動が不可能ともいえるのですが、学生がいなくなってしまうことの理由を考えてみたいと思います。

まず我々の側の問題として、学生に対する呼びかけの努力が十分になしえなかったということがいえるのですが、それ以上に根本的な理由があるような気がします。

それは、学生の意識の質が変ってきているということとです。学生運動を通しての、大学を始めとする権威の否定、それにひきつづく自己の否定——そういったものが、ものごとへの確信を失わせしめ、なにごとをするにも意義を見い出せなくなっているのではないのでしょうか。



又、ワークキャンプの形態自体についてついでに考えていくと、このワークキャンプにおけるボランティア活動自体が外国から輸入された形態であって、西欧の考え方に基づいたものであるということにつきあたります。そして、この形態をそのまま日本に導入すること自体に、無理があつたのではないかと思うのです。日本的な、日本人の性格にあつた方式が考えだされてもいいのです。考えてみれば、「ワークキャンプ」ということは、「ボランティア」ということは自体外来語で、日本語となりきっていません。

要するに、日本人の特性に基づいたところの確固としたSCIの運動はまだできあがつてはいないといえるでしょう。今後、混迷をつづけて残っていくものが、本物なのではないかと思っています。



ミニ・ニュース

キブツからの便り



テルアビブ空港件から大分日もたちます。私達の方、東京で心配するほど感じるところはありませんでした。キブツの人からは二三日テルアビブやハイファへは行かないようにとの忠告があつたくらいです。我々研修生のキブツに対する信用は、こんな事件があつたくらいでどうこうするようなものではありません。しかしこの事件で、私ではなく日本人である「私」というのを強く感じさせられました。

今、果樹園が収穫の時期で、全員かりだされています。ナシとリンゴが主で、そろそろぶどうが始まります。

シャバットにはみんなおもしろいものごとをしています。この間、四五人の人が朝四時頃地中海へでかけていって、ポルトガルから流れてきたという大きなタルをはるばる四〇分の道のりをころがしてきたというのですから、ただただ感心しています。こちらは元氣一杯生活しています。そろそろ暑い夏を狭くて楽しい事務所でごんばっておられると思います。

「クファール・マサリック 満江栄子」